

たのしい
組版

組版を愛する
すべての人に捧げる
組版基礎学習
マガジン

VOL.6

EXCITING TYPE

和文組版と欧文組版の違い

箱組とラグ組

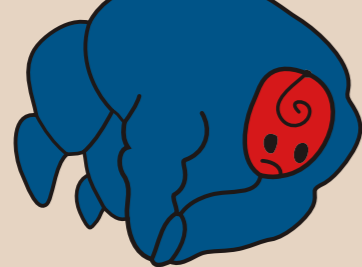
段落や見出しの考え方

数字の用法

約物の用法

SWAAK!

欧文組版特集



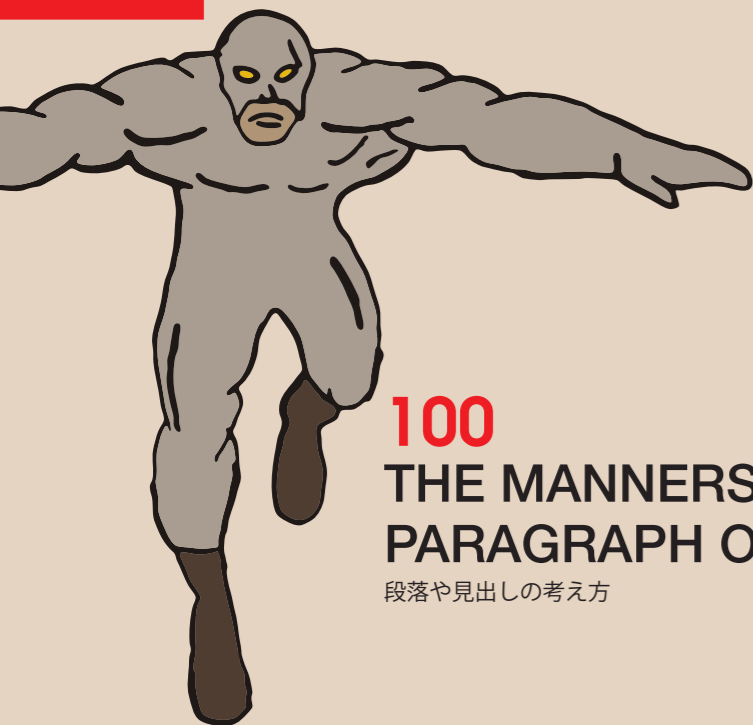
96 THE DIFFERENCE BETWEEN JAPANESE AND ENGLISH

和文組版と欧文組版の違い



98 TWO KINDS OF HOW TO ARRANGE

箱組とラグ組



100 THE MANNERS OF PARAGRAPH OR A TITLE

段落や見出しの考え方



102 EXPRESSION OF A NUMBER

数字の用法



104 THE CHANGING PUNCTUATION MARK

約物の用法



106 ET TOPICS

たの組トピックス

INTRODUCTION

今号のテーマは「欧文組版」です。

「日本語の組版のことだけ知っていればいい」と思う方もいるかもしれませんが、欧文組版の基礎知識だけでも理解しておくことが肝要です。なぜならば、現代では、日本語の文中でも欧文の表記が使われることが多く、その際に欧文組版の知識が求められることがあるからです。また、急に欧文主体の仕事に携わることになった時にも、欧文組版の基礎を知っておくだけで、慌てずに済むのではないのでしょうか。

そもそも、欧文は海外のものとはいえ、組版のことですから、和文組版の知識がまったく活かさないわけではありません。それは、日本の組版そのものが部分的に欧文にならって作られたためです。しかしながら、欧文と和文を比べると、性質の異なるところがあるので、多くの面で和文組版との違いに注意しなければなりません。今号を通して、それらの注意すべき点について学習してみましょう。

TWO KINDS OF HOW TO ARRANGE

箱組とラグ組

欧文は日本語と同じように、一つの行長を設定し、すべての行頭と行末を揃えて組むこと（箱組）もできますが、日本語のような等幅フォントではないことが多いので、注意すべき点はいくつかあります。

端数はスペースで調整

これまでも学習したように、日本語の活字は正方形を基準に設計されているので、箱組に適していますが、欧文は文字ごとに幅が異なるので、単純に「○字詰」という設計ができません。

それでは、欧文ではどのように、箱組をするのかというと、ワードスペースで調整をします。前項で述べたように、欧文は均一な濃度のテキストが読みやすく、分かち書きをするという性質から言っても、字間はベタ組を維持するようにします。

ワードスペースには、和文用のスペースと異なる、欧文スペースというものを使用するのですが、このスペースは、現在のコンピューターを使った組版では、常に一定のアキではなく、最小限・最大限のスペースを決めて、あとは状況によってアキが変化するという便利なものです。

欧文の組版では、この欧文スペースを使用し、1行の中で端数が生じる時に、字間ではなく、ワードスペースで調整されるように組みます。現在は、この欧文スペースを使えば、機械が自動的にアキを調整してくれますが、活版の時代には、これをどのようにやっていたのかを考えると、かなり大変な作業だったのではないかと想像できます。

ハイフンを使おう

箱組の場合にもう一つ注意しなければならないのは、欧文スペースを使っただけでは、調整が上手くいかないことがあるということです。スペースが広くなりすぎてしまったり、複数の行にわたって、似たような位置にスペースが並んでしまい、読みにくくなることがあります（詳細は本誌2号P23のコラムを参照）。

行長が短い場合、字数の多い単語が出てくる場合にこのような現象が起きますが、このような時には、文末に収まらない単語を追い出すのではなく、ハイフンで区切って表記することによって、上手く調整することができます。

現在のコンピューターを使った組版では、アプリケーションに欧文辞書が搭載されており、設定さえすれば、自動でハイフネーションを行ってくれるという便利な機能もあります。

- ハイフネーションは、通常、音節で行いますが、
- ・固有名詞（人名、地名、書名など）には使用できない
 - ・ハイフンで区切る行を続けてはいけない（2行までは許容し、3行以上続けてはいけないという場合もあります）
 - ・ページの最終行でハイフネーションし、単語を2ページにわたって表記してはいけない
- などのルールがあるので、注意が必要です。



文末を揃えないラグ組

欧文は和文と異なり、本文組では字間を空けません。これは、前項でも紹介したように、

- ・分かち書きをする
- ・文字とスペースのコントラストによって、読みやすくしている

という性質があるからです。

このような和文とは異なる性質があるためか、欧文の本文では、箱組だけではなく、行頭のみを揃え、行末を揃えないという組み方（ラグ組）もあります。

行末を揃えないことから、スペースを調整する必要がなくなり、単語とスペースの間隔は常に一定に保つことができるので、むしろ、欧文においては、ラグ組の方が可読性に優れているとも言えるのではないのでしょうか。

ラグ組の注意点

ラグ組は行末を不揃いにしても良い組み方ですが、不揃いでも良いとは言っても、限度はあります。最長・最短の行末の位置があまりにも揃っていないと、見た目が美しくないのはもちろんのこと、読みづらさにも繋がってしまいます。

ラグ組をする際には、最初に最適な行末のラインを決め、そこから最長・最短の行末のラインの基準を決めます。目安としては、最長・最短の行末のラインの差は、2単語程度（単語の長さは一定ではないので、一つの目安ですが）とし、それ以上の差を付けないようにします。

なお、詩や広告のコピーなどでラグ組にする場合には、文の区切りが良いところで改行をするため、行末の段差が大きくなるのが普通です。これらはどちらかといえば、読みやすさよりも、見栄えを優先するものなので、例外となります。

また、ラグ組の際にも、行末でのハイフンによる分割をすることができます。この場合にも、ハイフンを使用した方が、調整しやすいです。

What Gutenberg did was to invent typesetting and mass production. For the first time in history a true technical system of mass production was applied: from a punch (the

What Gutenberg did was to invent typesetting and mass production. For the first time in history a true technical system of mass production was applied: from a punch (the patrix) cut in steel, a mold (the



Q. ワードスペースの適正值は？

A. ワードスペースは「単語と単語が明確に分かれて見える必要最小限のスペース」ですが、これを明確な数値で限定するのは難しいです。なぜならば、スペースの幅は同じ数値に設定しても、書体や文字の並び、行長などの紙面全体の設計によって、見え方が異なるからです。スペースは、狭すぎると窮屈な印象になり、広すぎると散漫な印象になるという特性を押さえつつ、その都度、組版をする人が判断する必要があります。

Q. 欧文の適正な行長は？

A. 一般的には、1行に10~12単語程度が読みやすいとされているようですが、これもワードスペースと同様に紙面の条件によって変化があるので、明確な数値で限定するのは難しいです。欧文を読むことができなくても、どの程度の長さであれば、スムーズに読むことができるかを想定することができなくてはなりません。ですから、和文・欧文に係わらず、日頃から意識して「読みやすさ」を判断できる目を養うことが大切です。ちなみに、「行長が短い時には、行間を狭くする」「行長が長い時には、行間を広くする」というのは、欧文でも同じです。

What Gutenberg did was to invent typesetting and mass production. For the first time in history a true technical system of mass production was applied:



段落の作法

段の始まりであることを分かりやすくするために、行頭を下げることを段落（インデント）と言います。和文では、一番最初の段からインデントにするのが普通ですが、欧文では、一番最初の段では、インデントにしないのが一般的のようです。

これは、文の始まりは段落を作らなくても、始まりであることは明らかなので、インデントは不要であるという考えに基づくものですが、近年は和文でも、一番最初の段で、段落を作らない形式が見受けられるようになってきています。

行長に合わせて段落を変える

和文の文字は、すべての文字が全角を基準に作られているので、インデントは常に1字分（全角）とします。一方、アルファベットは、文字の幅が不均一なので、段落をどの程度下げるのが難しいところです。

欧文で全角のような役割で使われるものとして、「em スペース」があります。「em」とは「エム」と読みますが、これはアルファベットの大文字の「M」に由来するものです。「M」の幅は、文字の高さとほぼ同じであることから、活字は正方形に近い形になるため、和文でいうところの全角のような扱いをすることがあるのです（半角に相当する「en スペース」は、小文字の「n」に由来します）。

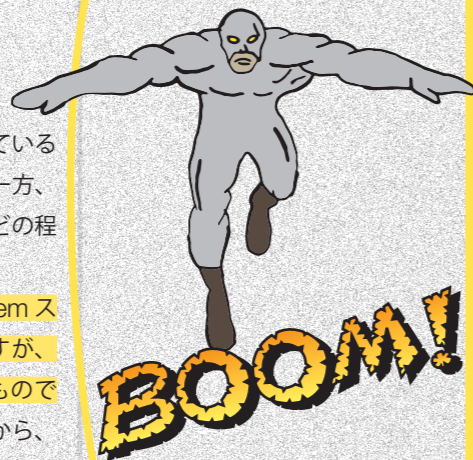
M

資料によっては、インデントの適正値を em スペースに限定しているものもあるようですが、厳密に言えば、この全角のような考え方は、和文の組版的な発想です。

実際は欧文におけるインデントは、em スペースに限定されるのではなく、紙面のバランス（書体、行長、行間など）によって変化させる必要があります。

段落のアキとして認識できることを最低限のレベルとして、必要以上に目立つことがないように配慮します。特に、**行長によって、アキの印象は大きく変化するので、**

- ・行長が長い→段落も広く
 - ・行長が短い→段落も狭く
- というような調整が必要です。



What Gutenberg did was to invent typesetting and mass production. For the first time in history a true technical system of mass production was applied: from a punch (the patrix) cut in steel, a mold (the matrix) was produced.

What Gutenberg did was to invent typesetting and mass production. For the first time in history a true technical system of mass production was applied: from a punch (the patrix) cut in steel, a mold (the matrix) was produced.

見出しに使用する書体

和文では、本文に明朝体、見出しにゴシック体というのが、定番の組み合わせとしてよく使われます。**欧文の見出しには、本文で使用しているローマン体よりも細いウェイトを選択し、大きいサイズで使用するのが一般的のようです。**見出しに細い書体を使用することが基本となっている背景には、本文に黒みの強いローマン体を使用することが前提となっていることも、一因としてあるのではないかと思います。

もちろん、細いウェイトを使用するのは、一つのパターンであって、逆に太いウェイトを使用することもあります。さらにアクセントを強くしたい場合には、サンセリフ体や装飾書体など、本文とは印象が異なる書体を使用することも可能です。

ただし、本文の文字と大きく印象が異なる書体を用いる場合には、使い方を間違えると、脈絡のない適当な書体を使ったように見えてしまいます。これを防ぐためには、**本文の文字とは、サイズや余白でしっかりと差を付けることが必要です。**この他にも、欧文の見出しでは、イタリック体、**コンデンス体（ウェイトの一つ。文字の幅が狭く設計されている）、**スモールキャップ（エックスハイトの高さに合わせて作られた大文字。単純に大文字を縮小したものではないので要注意）を使用することもあります。



見出しの決まりごと

欧文の見出しでは、文章が長く2行になる場合に注意しなければならないことがいくつかあります。それは、

- ・単語をハイフンで分割してはいけない
- ・できれば1行にする。行数が増えても2行まで

というものです。紙面を建物や街の設計に見立てて考えると、見出しは看板のような役割を果たすものですから、視認性を重視する必要があります。つまり、一瞥しただけで、なんの看板（見出し）なのか分からなければいけないわけです。そういった点で、これは和文・欧文に係わらず、注意したいところだと言えます。

THE MANUSCRIPT

A printer receives mss. of endless variety and it would be impossible to suggest any one procedure to cover all occasions. A publisher of repute would, in all probability, have read carefully through the ms. be-

The Manuscript

A printer receives mss. of endless variety and it impossible to suggest any one procedure to co casions. A publisher of repute would, in all p have read carefully through the ms. before send

THE MANUSCRIPT

A printer receives mss. of endless variety and it would be impossible to suggest any one procedure to cover all occasions. A publisher of repute would, in all probability,

THE EVILS OF INTERNATIONAL FINANCE

No one who writes of the evils of international finance runs any risk of being "gravelled for lac of matter." The theme is one that has been copiously developed, in a variety of keys by all sorts and

段落や見出しの考え方

段落や見出しについても、和文と欧文では異なる点があります。欧文組版における、段落や見出しの位置づけについて知ること、日本語の組版をするうえでも応用することもできるのです。

THE MANNERS OF PARAGRAPH OR A TITLE

EXPRESSION OF A NUMBER

数字の用法

数の表記のしかた

文中で数を表記する場合には、アルファベットを使って単語として表記する形が基本となります（特に内容が文学的なもの場合）。ただし、桁の大きい数は単語として表記すると読みづらいので、数字を使って表記します。これは一つの目安ですが、3桁以上の数字は、数字で表記したほうが読みやすいでしょう（新聞などでは、2桁以上を数字としている場合もあります）。また、面積や容量、西暦の表記には数字を使用するのが一般的です。

アラビア数字の用法

欧文のアラビア数字には、オールドスタイルとライニングの二つがあります。オールドスタイル数字は、小文字のアルファベットになじむように設計された数字で、アルファベットと同様に、文字の幅や高さに差があるものです。書籍の組版はもちろんのこと、格調高い印象のものに使用すると効果を発揮します。

ライニング数字は、文字の幅や高さがほぼ均一に設計されたものです。数字に重きを置く経営報告書や、表組などでは、数字がきちんと整列して見えるため、こちらの数字を使用します。

ローマ数字の用法

ローマ数字とは、アルファベットを使って数字を表記するもので、ヨーロッパにアラビア数字が伝わるまで、数字の表記は、ローマ数字しかありませんでした。

現在は、見やすさ、分かりやすさといった点で、アラビア数字に軍配が上がったと言っていいほど、ローマ数字が使用される場面は限定されます。ですが、現在でも伝統的なイメージや、格調の高さが求められる場面では、ローマ数字が使われることが多いようです。

欧文における数の表記には、アルファベットを使って単語として表記する以外に、

アラビア数字

ローマ数字

1 2 3

I II III

という2つの表記のしかたがあります。

0123456789

オールドスタイル数字

0123456789

ライニング数字

数字と単位の表記

数字を使う際に、よく出てくるのは、前後に単位が付くというケースです。この場合に、数字と単位の間スペースの有無に注意しなくてはなりません。

まず、単位には、「mm」や「mg」などのようにアルファベットを使って表記するものと、「%」や「\$」などのように、記号を使って表記するものがあります。この違いによって、数字と単位の間アキを入れる必要があるかどうかを、ある程度判断することができます。

アルファベットを使って表記する単位

アルファベットを使って表記している単位は、省略して表記しているものです。本来の「mm」は「millimeter」、「mg」は「milligram」と表記しますが、見やすさ、読みやすさを考慮し、省略しています。

つまり、これらの単位の本来の形は一つの単語として扱えるものなので、省略せずに単語として組む（スペルアウトと言います）場合には、

one millimeter, one milligram
となります。これらは単語間にスペースを入れるのと同様に、数字と単位の間にはスペースを入れる必要があります（なお、単位をスペルアウトする場合には、数字も合わせてスペルアウトします）。したがって、単位を省略して表記した場合にも、

1 mm, 1 mg
というように、数字と単位の間スペースが必要になります。

記号を使って表記する単位

一方、「%」や「\$」なども役割としては、単位を省略したのですが、完全に別の記号に置き換えられているので、一つの文字としては認識されません。したがって、多くの場合は、これらの記号とセットで数字が使われると考えられますが、その場合には、

1%, \$1
というように、数字と単位の間スペースを入れません。これらをスペルアウトする場合には、やはり one percent, one dollar
というように、数字と単位の間スペースが必要となります。なお、例に挙げた「%」は、国によっては「per cent」と2語で表記することもあるので注意してください（アメリカでは1語、イギリスでは2語）。

欧文にならった和文の組版

和文の組版でも、数字と単位の間4分アキを入れたり、入れなかったりしますが、実はこれは欧文組版にならって取り入れられたルールなのです。

欧文と同様に、和文の組版でも、アルファベットで表記した単位と数字の間は4分アキとし、記号で表記する単位と数字の間はベタ組にします。

ですが、近年は色々事情が変わってきており、そもそも日本がお手本としていた欧米では、アルファベットを用いた単位と数字の間スペースを入れない組み方も一般的となってきたようです。そのため、「日本語も数字と単位の間はベタ組で良いのではないか」という意見も聴こえるようになってきています。どういう理由があつて、数字と単位の間を空けたり詰めたりしているのかを押さえておくことは重要ですが、それと同時に、こういったルールは、時と場合によって、変化することがあるということも同時に認識しておく必要があります。



1 2 3 4(5-1) 5 6 7
I II III IV V VI VII
8 9(10-1) 10 40(50-10) 50 90(100-10)
VIII IX X XL L XC
100 400(500-100) 500 900(1000-100) 1000
C CD D CM M

ローマ数字

THE CHANGING PUNCTUATION MARK

約物の用法

和文の組版には、欧文から拝借した約物も多く使われているので、欧文の約物の中には、私たちにとってもなじみ深いものも多くあります。ですが、和文と欧文では、異なった意味合いで使われるものがあったり、国によって組み方が異なるものもあるようです。

句読点

欧文の句読点には、「, (カンマ)」「. (ピリオド)」の他に、「: (コロン)」「; (セミコロン)」が含まれます。いずれも、和文の句読点と同様に、文を読みやすく区切る役割を持っていますが、特にコロン、セミコロンは、和文での扱いとは性質が異なるので注意が必要です。

欧文では、カンマ、セミコロン、コロン、ピリオドの順に、区切りの強度が高くなります。カンマ、ピリオドは前の文字とベタ組にし、後ろにワードスペースを入れます。なお、**ピリオドは句点の役割を持っているので、後ろのスペースを広く取るのではないかと考えてしまうかもしれませんが、スペースは一つで充分です。**

○ would be gained. We could then take for granted
 ✕ would be gained○We could then take for granted

コロン、セミコロンも基本的には、カンマ、ピリオドと同様に、前をベタ組にし、後ろにスペースを入れますが、フランス語に限り、前の文字との間を空けて組みます。

(フランス語) nnn : nnn nnn ; nnn

疑問符、感嘆符

「? (疑問符)」「! (感嘆符)」も、句読点と同様に、前の文字とはベタ組にし、後ろにスペースを一つ入れるのを基本としますが、これも国によって慣習が異なり、フランス語では、前の文字との間にもスペースを入れます。スペイン語では、文の始まりと終わりに入れ、最初の方を逆さまにします。

(フランス語) nnn ? nnn !
 (スペイン語) ¿nnn? ¡nnn!

クォーテーションマーク(引用符)、アポストロフィ

和文のくっつき類と同様に二つで対という扱いをします。文中に引用文を挿入する時に使用するものですが、引用文の中に、さらに引用文があるというような時のために、「' (シングル)」と「" (ダブル)」という2種類のクォーテーションマークがあります。シングルとダブルを使用する場合に、どちらが外側になるのかは、地域によって異なるようです。

ちなみに、ドイツやフランスでは、クォーテーションマークとして、他の約物を使用します。

(ドイツ語) »nnn« „nnn“
 (フランス語) « nnn » (前後にスペースを入れる)
 「' (アポストロフィー)」は、所有格や表記を省略する際に使用する約物で、シングルクォーテーションマークの右側と同じものを使用します。なお、**アポストロフィーは「' (プライムマーク)」と間違えやすいので、注意しましょう。**

○ isn't Tom's
 ✕ isn't Tom's

パーレン(かっこ)、ハイフン

パーレンは、和文のかっこ類と同様に二つで対という扱いをします。また、

- ・パーレンの内側をベタ組にし、外側にスペースを入れる
 - ・パーレンの直後に句読点を入れる場合はベタ組
- という点も和文と同様です。

ハイフンの前後もベタ組を基本としますが、スペースの微調整をすることもあります。

ちなみに、パーレン、ハイフンの天地の位置は、大文字小文字まじりの文を組んだ時に中心に見えるように作られているので、**大文字やライニング数字のみで構成されている文の中で使用すると、下がって見えてしまいます。この場合は、ハイフンの位置を上げて調整することもできます。**

(NNN) → (NNN)
 22-33 → 22-33

ダッシュ

ダッシュには、「- (半角ダッシュ/en dash)」「— (全角ダッシュ/em dash)」があります。

半角ダッシュは、期間や時間、場所を表記する際に「から」という意味で使用し、前後をベタ組にします。なお、こういった表記をする場合に、和文では「~」を使用することが多いので、欧文でも似たような形の「~ (チルダ)」を使用してしまいがちですが、「~」は数学用記号で「ほぼ等しい」という意味を持っており、「≐」に相当する記号です。

また、**半角ダッシュはハイフンと似ていますが、これらを使い方を間違えると、文の意味合いが変わることがあるので注**

意しましょう。例えば、

Brown-Smith theory (半角ダッシュを使用)

上記は、「ブラウン氏とスミス氏が唱える説」となりますが、

Brown-Smith theory (ハイフンを使用)

上記は、「ブラウン=スミス氏の説」となります。

Berlin-Baden-Baden (半角ダッシュ・ハイフンを使用)

上記は、「ベルリン市とバーデンバーデンの間」となります。「Baden-Baden」は地名であり、これで一つの単語なので間に入るのはハイフンです。

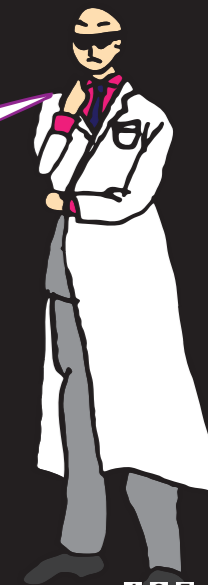
電話番号や郵便番号のように、数字を繋ぐ場合にも半角ダッシュを使用しますが、フランス語ではハイフンを使用するなど、国によって違いがあるようです。

この他にも、ダッシュは文中で一呼吸の間を置く時にも使いますが、全角ダッシュを使用する場合は、前後をベタ組にし、半角ダッシュを使用する場合は、前後にスペースを入れます。なお、書籍のような読み物に使用するのは、全角ダッシュが一般的で、書体によって長さが異なるため、調整して使うこともあるようです。

スラッシュ

「/ (スラッシュ)」は、「AまたはB」というように、並列する二つ以上のものを表記する際に使用します。本文組では、スラッシュの前後をベタ組にするのが基本です。

TO BE CONTINUED





日本の明朝体のルーツはローマン体!?

明朝体は明王朝時代の中国で作られた書体で、これが日本に伝わり、印刷用書体としての明朝体が作られました(3号P36『和文書体の基礎知識』)。

現在、国内で使用されている明朝体の二大源流として知られているのが、築地体と秀英体です。日本国内で初めて確立した明朝体は築地体で、1872年に設立された長崎新塾出張所・活版製造所(後の東京築地活版製造所)で製造されました。

実は、築地体を作った長崎新塾出張所・活版製造所のルーツを辿っていくと、明朝体の大元である中国ではなく、アメリカ人が作った金属活字に繋がります。

長崎新塾出張所・活版製造所を設立したのは、本木昌造という人物で、彼は1869年に、アメリカの宣教師、ウィリアム・ギャンブルから金属活字の製造法、組版、印刷方法を教わり、国内で初めて金属活字を製造した人物でした。

それでは、なぜ、アメリカ人が日本語の活字の製造法を会得していたのでしょうか。厳密に言うと、ウィリアム

・ギャンブルが手掛けていたのは、日本語の活字ではなく、中国の漢字の活字だったのです。

この頃のアメリカの宣教師たちはキリスト教を広めるため、また、中国の素晴らしい文化を取り込みたいという目的もあり、中国で布教活動を行っていました。

その活動の一環として、中国に印刷所を作り、会報などを発行しており、その印刷物を作るための活字を作る際に、欧米のローマン体に当たる書体として、その時代から200年ほど前に使われていた明朝体が本文書体として選定されたということなのです(ちなみに中国では王朝が変わるごとに使う書体を変えていたので、当時はあまり使われていなかったと思われます)。

本木昌造はアメリカ人が作った漢字の活字をベースに、仮名の活字を作成し、その金属活字が築地体のベースとなっていきます。つまり、我々が日常で使っている明朝体の源流はアメリカ人が作った明朝体の金属活字と繋がっているのです。

かつてアルファベットに J、U、W はなかった

ヴェネチアンローマンやオールドローマンなどの古風なタイプのローマン体は、ローマの碑文をモデルに作成されたものが多いので、どれも字形が似た書体になっています。

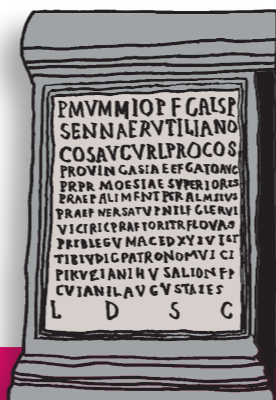
しかし、よく見てみると、同じものをモデルとしたにもかかわらず、特定の文字のエLEMENTが大きく異なっていることが分かります。中でも大文字の J、U、W の差が大きいです。

これは古代ローマの時代に J、U、W の文字がなく、モデルとしていた碑文に、これらの文字がなかったためです。ローマの碑文に存在しない文字は、それぞれの書体を手掛けたデザイナーが独自にデザインした文字となっており、それぞれの書体が持つ造形の方向性の違いが見えてきます。

なお、アルファベットの元となるギリシャ文字の原型が作られたのが、紀元前800年頃、それらがイタリアに伝わったのが紀元前600年頃のことです。ギリシャ文字から20種類の文字を拝借してラテン文字(ラテンアルファベット)が作られたようです。

その後、紀元前27年に古代ローマ帝国が成立し、新たに G、Y、Z の文字が加わり、アルファベットは23種類の文字で構成されるようになります。さらに、J、U、W が加わった現在のアルファベットの構成になるのは、16世紀に入ってからのことでした。

Discovery



合字の使いどころ

合字(ごうじ)は、二つ以上の文字を一つの活字として扱うもので、欧文の組版では必須アイテムとなる活字です。例えば、「f」の直後に「i」が来る場合に「fi」と二つの文字を繋げて合字にします。

これは金属活字で組んだ時に、これらの文字が並んだ場合、それぞれの頭にあるドット(点)がぶつかって隙間が空いたり、破損することがあったため、作られた合字です。現在でもこの風習が引き継がれ、不格好な繋がり方を防ぐために合字が使用されます。

その他にも、様々な国の言語にある重母音(連続した連続した二つの母音)を合字で表現します。なお、ドイツ語の ck、ch も合字ではありませんが、二つで一つの文字と言う、合字のような扱いをするため、字間を広げる際にもこれらの文字間は広げてはいけません。

Caution



タイプライターの慣習

ワープロやパソコンがない時代は、原稿を作成する手段が、手書きかタイプライターに限られていました。タイプライターは印刷専用機として作られたものではなかったため、打てる文字に制限があり、それらを補うために様々な工夫がされました。

かつては、タイプライターで作られた原稿を元に、印刷のプロが印刷に適したものに手直ししつつ、版を作成していたということです。

しかし、これらのワープロの慣習が誤って組版に適用されることがあり、正しくない組版が見られることがあります。以下に挙げた例はあくまでもワープロの制限された機能を補うために用いられた技法なので、印刷物に適用するのは相応しくありません。

・インデントは5文字分のアキ

段落が変わったことが分かるように、タイプライターでもアキを入れていました。しかし、インデントは固定値ではなく、行長によって、変化させるものです(P100『段落や見出しの考え方』参照)。

おもな合字

- fi fl ff ffi ffl f合字
- *fi fl ff ffi ffl* f合字(イタリック)
- × fi fl ff ffi ffl 合字にしていない
- × *fi fl ff ffi ffl* 合字にしていない(イタリック)
- st ct st合字、ct合字
- Æ Œ æ œ 重母音
- ß ← f + s エスツェット



ABC JUW	abc juw	Jenson
ABC JUW	abc juw	Garamond
ABC JUW	abc juw	Galliard
ABC JUW	abc juw	Janson Text
ABC JUW	abc juw	Caslon
ABC JUW	abc juw	Baskerville
ABC JUW	abc juw	Minion



参考文献

- 『欧文書体 その背景と使い方』（小林章/'05）
『デザインの現場』（'06年6月号）
『日本語組版の考え方』（向井裕一/'08）
『日本語活字ものがたり—草創期の人と書体』（小宮山博史/'09）
『欧文組版 組版の基礎とマナー』（高岡昌生/'10）
『タイポグラフィの基本ルール』（大崎善治/'10）
『文字の組み方 組版／見てわかる新常識』（大熊肇/'10）



企画・編集

アイワード プリプレス部



株式会社アイワード

<http://www.iword.co.jp>

本社 〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5番地91
東京営業部 〒101-0065 東京都千代田区西神田2丁目4番3号 高岡ビル6階
札幌工場 〒060-0033 札幌市中央区北3条東4丁目5番地64
石狩工場 〒061-3241 石狩市新港西3丁目768番地4

TEL 011-241-9341 FAX 011-207-6178
TEL 03-3239-3939 FAX 03-3239-3945
TEL 011-251-0009
TEL 0133-71-2777 FAX 0133-71-2895